



重訂

日本書紀

夏





日本書紀卷之四



夏

漢書律曆志云夏の假方り假ハ大なり萬物假大なり  
少のさなり少雅又と特明と云〇和氣小なりと云  
しハあつと云ふと云ふなり  
あしおぬす勢勢乃義と云ふ

素問より云く夏三月これと蕃秀といふ天地氣交也  
萬物華實夜又臥一寐不起一厥於日忘也  
て然るのみならず一先英華と云ふ一華秀を成し  
天を以てして地を以てて地を以てして天を以てして  
一長と短とを以てして一長と短とを以てして一長と  
短とを以てして一長と短とを以てして一長と短とを以てして  
長れ送るなりこれ一送れ送るなりと傷して一收と云  
者か

日本書紀卷之四

千金方いんく丸友の百面とあつて妙なるま  
人として面皮あつく癩を生し又面風とあつて

又曰友七中二日苦味代食物とあつて辛をすて  
肺管とあつて

因經のいんく丸月冷石鉄拍子と枕して冷とあつて  
なつた大に人の目と換と

書生徹よのいんく丸れ書を契ありあま菽を食と  
これとあつて契よ一なるいんく丸

金匱要略いんく丸徳禽賦の心と今多くと忌恐く  
死守我靈誓と犯さる守く苦契と食していんく丸

これとあつて

月令廣義いんく丸九月より十月まで一切瀟沓物  
及水とのむると忌又あつて鹽滌とく丸

又いんく丸腎氣衰終とあつて房色あつて丸元  
氣と傷り来と換ひ宣戒之

又いんく丸汗の衣裳と遠よりと日お病し又これと忌  
世ハるあつて癩子とせり

書生書書にいんく丸盛思藝と徹を冷氷とく丸と洗  
すまみ腕と乾板とびんく丸や沐浴とく丸や切

楚吹へー又冷あつて足と濯へる丸

又よくこまは暑時か居れよに坐臥とくし寒とれに瘥  
とまし冷あまきと瘥とます

又曰五月の心腹に腎衰と精化して水こま人秋水弱く  
外凝丸保齋して法氣を固とて考よ熱物とくか  
胎中澄暖ちり生肌果荔枝氷冷淘粉粥降蜜丸合  
へうの食と食とれは多くの秋法よ必瘥劑とます  
冷水とひ沐浴して面と洗ひ背と淋く事なれ  
人よて暑熱眼晴く脈脈厥逆し霍乱吐瀉筋筋  
乃瘥とゆせし風よ熱く多しなれ眠中よ人成  
まき扇と搦しむ事なると汗体毛孔用展とく風

へやひこれとねせ人よして風痺不仁言は寒温の疾  
と熱しむ年壯にして即言とるはくとも亦病根  
を移りあり氣衰し方人を校教乃害よ愈とるごとし  
瘥中よましこれとまし

後ま人うよく夏月肉よ供法有り冷水との瓜桃生冷  
の相宜くゆ食しゆこれとましとれは秋冬瘥劑  
とましとま事とまぬる也

夏月暑よ傷くまき身弱たれし瘥とる人有り伝  
これと夏瘥しよま病瘥よまきと服す  
又万葉集十とある大伴赤物喉瘥人哥よ

石麻呂爾五物申夏瘦尔吉路云物曾武奈伎  
取食 櫻繡魚の皮瘦と作事 厨書子  
凡え作し給くけよまゝに人三事あり

四月

乾月 結と仲月 〇四月乃わ名と仲月と云わのちま  
四月乃乃祭 薄水の中 〇四月乃名 孟夏 余月  
四月乃乃祭 薄水の中 〇四月乃名 孟夏 余月

朔日 國信今日より八月廿日まで 袷と恙虫と日と夜  
せしより古きにせやくしせり

八日 滋佛日あり 灌佛とてしより高僧佛の是日 滋佛と  
あり 都梁香とてしより高僧佛の是日 滋佛と  
色あり 丘降香とてしより高僧佛の是日 滋佛と

て 黄色水とて 安息香とて 玉色水とて 佛頂水と  
濃くとて 方彫建れ 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて  
本朝より 今日佛よ水と 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて  
の御事あり 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて

十五日 浮屠の結夏 今日より 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて  
洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて  
洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて  
洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて

昨日 沐浴

今日 梅雨より先とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて  
洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて 洗とて

四家磨よ忍え入りげな妻を頼むと多く又月を  
 梅屋敷の月分おとせ久く早に信これとさうし日  
 と云天をまよく日もさの時をまよハ屋宅と信理して  
 功多しこれハ磨古典ノ定役三功とて造他信理を  
 毛彩の時何事そのき入り四月より七月は功と毛功  
 と云二月三月八月九月を中功と十月より四月は  
 功多くと經功多くと信りあるまは月比日毎は信り  
 修造石の功多くとて方とさのたうけ下し又月定  
 梅屋敷とるぬゆりやあつ信よこれと仰り花磨しと  
 よ又年のむなしくとさうし

月天氣よは時書書等と日に晒して丸物のあし  
 へく紙又糊とつけとさう方をさうまき梅屋敷の後を  
 とひくをゆけとれハ徴ぞひと月合度家よとさう  
 衣服もとせぬしとさ梅屋敷乃温帯にけとさうあふ  
 日よさうせハ前並せぬとさ徴生せす

此月あつとさ一と筆を塩漬の貯へしをば先皮と書  
 てこらさ書とさて二つよりあつり月と塩とさ  
 入桶よさうしよ小米をもちぬまふとさて重くと  
 うけ重し又筆とぬく皮とさう熱湯あつゆひに  
 曬し花をく收貯用く付米漬よむとさて再の色に

去く解あり塩羊の塩湯はくせひこく湯にせ  
く去く一と居家心用るゑとあり

六月の白くものち馬豆大豆赤豆胡麻胡蘿蔔等也  
純陽の月をまじり精氣を保養して致すより次と月

度意あふ見たり又げ月暴怒して心を傷事なり是  
これとせせハ秋必瘧とくまふ又常水やく面と洗  
い出すく事といふ

五月去味丸と服せ六月より始くのせし一陽林集膏に  
去夏を腎氣丸より治し又夏ハ地黃丸と服と一  
冬ハ味丸と服とるにありとありと去味丸腎氣丸

地黃丸ハ冬ハ用く物ありハ味丸ハ去味丸に治す肉桂と  
かくあり又藤立奇の薬にハ藏ハ味丸ハ去味丸ハ  
肉桂又味丸とがくものより能く契湯とありと  
治す蓋運生油のからく去味丸より切文大  
あり蓋生油ハ一と服とるにありとあり

六月乃去候才一嘔吐才二吐却出才三玉凡生才  
去夏の二候より才四苦菜才五麻草花才  
去麦秋ハ太少満の二候あり

去夏屋ハ十分取字十分取字十分取字十分取字十分取字  
十分取字十分取字十分取字十分取字十分取字







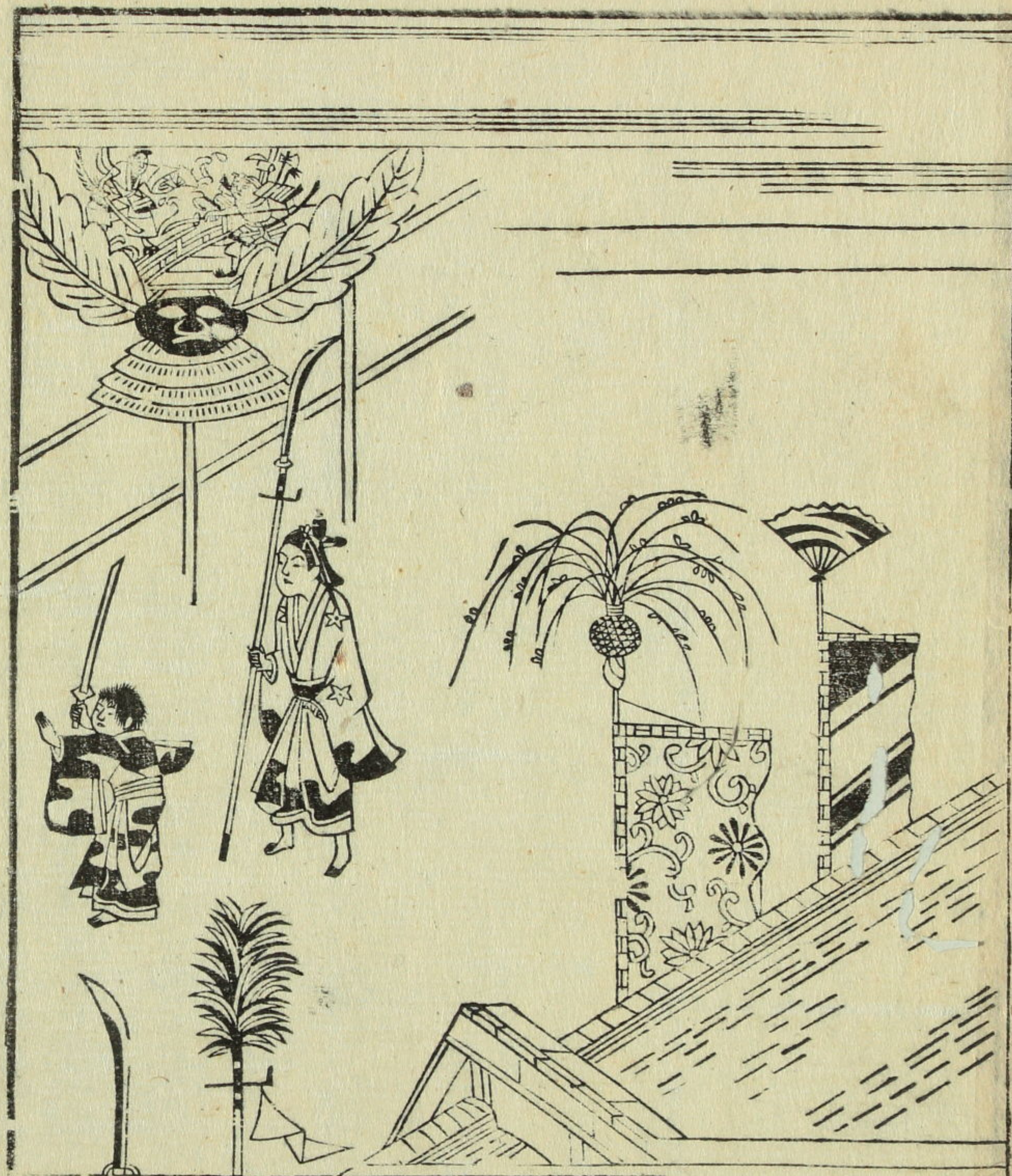
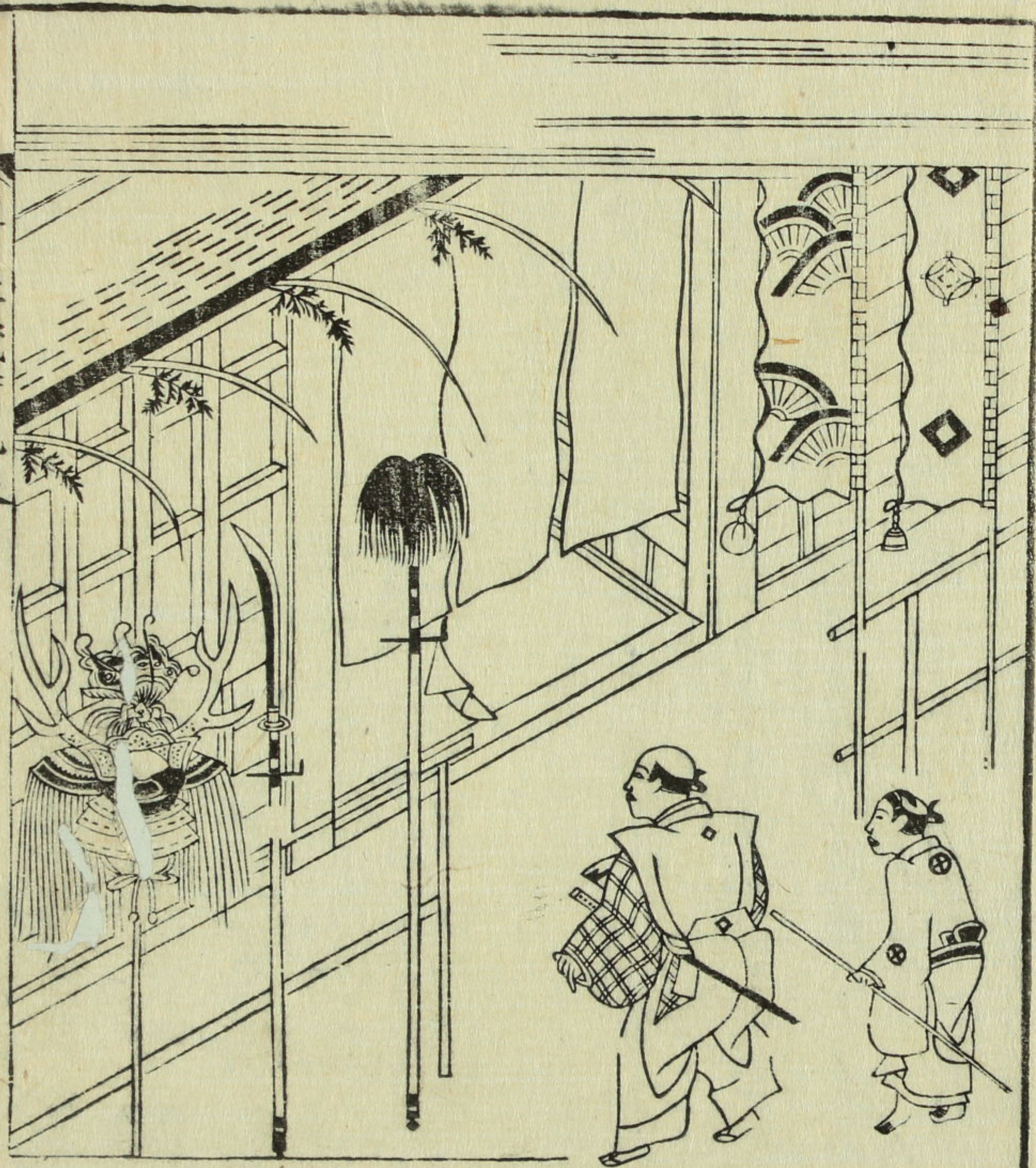
結ゆわ一ゆわ一ゆわ此二物を絞しぼ乃すなはちさうくおろりとすり  
今日搗うと食くふハ忠ちゆう意いなりとす月令廣義げうぎ  
ん屈くつ氣きう姉あね女め舅きゆうこれとけりて屈氣くつぎと取とひき  
取とくこれと食くふハ鬼きと降くだ伏ふくすり義ぎありと妻あ佐さ  
晴は明めいの終はつの心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに  
徳とくありの心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに  
とりの荒あ蕪わと心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに  
とれこれ湯ゆ湯ゆお包た裹ま志しくくのの教くわ世せなり  
こころとけりおまへん心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに

又月一法生す  
すあまは湯

包裹たうま志しくくのの教くわ世せなり

又葛湯くわとうとのむ事こと案あん的てき雜ざ記きハ午  
日ひ葛くわ湯とうとををく徳とく乃すなはちくく一いっ或ある細さい糸いとして湯ゆ又  
うりてこれをの火ひの湯ゆ氣きと助たすき二年にんねんとのがや  
とりの心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに  
徳とくありの心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに

○又の心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに  
十じゅう得とくの心こころえりかうさの徳とく徳とくなりとに  
又また葛くわ湯とうとのむ事こと案あん的てき雜ざ記きハ午  
又また葛くわ湯とうとのむ事こと案あん的てき雜ざ記きハ午  
又また葛くわ湯とうとのむ事こと案あん的てき雜ざ記きハ午



按ずる不風俗通より日五線乃多とありて  
脣<sup>いち</sup>のかけれの舌<sup>い</sup>及鬼<sup>ま</sup>と通<sup>か</sup>を<sup>し</sup>て瘡<sup>かさ</sup>瘻<sup>ろう</sup>とや  
ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>む<sup>む</sup>一<sup>い</sup>名<sup>な</sup>を<sup>し</sup>命<sup>めい</sup>綱<sup>きやう</sup>一<sup>い</sup>名<sup>な</sup>を<sup>し</sup>色<sup>しき</sup>綱<sup>きやう</sup>一<sup>い</sup>名<sup>な</sup>を<sup>し</sup>  
衛<sup>ゑい</sup>索<sup>さく</sup>といふと載<sup>の</sup>り又<sup>ま</sup>提<sup>てい</sup>系<sup>けい</sup>録<sup>ろく</sup>より小人<sup>せうじん</sup>端午<sup>ぼんご</sup>に  
雜<sup>ざ</sup>録<sup>ろく</sup>といふ合<sup>が</sup>款<sup>くわん</sup>と結<sup>むす</sup>ひ結<sup>むす</sup>ひ又<sup>ま</sup>纏<sup>ちん</sup>と<sup>し</sup>りか  
る<sup>る</sup>意<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>る

○又世傳より今日<sup>けふ</sup>蓄<sup>たく</sup>湯<sup>とう</sup>と用<sup>もち</sup>く沐<sup>ぼく</sup>と<sup>り</sup>あり  
按<sup>あ</sup>ずる<sup>る</sup>大<sup>たい</sup>戴<sup>たい</sup>終<sup>しゆう</sup>より五月<sup>ごご</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>蓄<sup>たく</sup>湯<sup>とう</sup>を<sup>し</sup>沐<sup>ぼく</sup>也<sup>なり</sup>  
楚<sup>そ</sup>辭<sup>じ</sup>より浴<sup>よく</sup>湯<sup>とう</sup>を<sup>し</sup>沐<sup>ぼく</sup>と<sup>り</sup>今<sup>いま</sup>此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>蓄<sup>たく</sup>  
湯<sup>とう</sup>と用<sup>もち</sup>く沐<sup>ぼく</sup>と<sup>り</sup>る<sup>る</sup>意<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>る

○又今日<sup>けふ</sup>婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>女子<sup>しよ</sup>たり<sup>たり</sup>又<sup>また</sup>高<sup>かう</sup>帝<sup>てい</sup>と<sup>り</sup>挿<sup>さく</sup>こ<sup>こ</sup>又<sup>また</sup>  
勝<sup>かち</sup>より<sup>り</sup>如<sup>ごと</sup>此<sup>こゝ</sup>と<sup>り</sup>れ<sup>る</sup>病<sup>びやう</sup>と<sup>り</sup>降<sup>くだ</sup>くと<sup>り</sup>俗<sup>ぞく</sup>とい<sup>ひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>  
策<sup>さく</sup>射<sup>しゃ</sup>雜<sup>ざ</sup>記<sup>き</sup>より端午<sup>ぼんご</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>蓄<sup>たく</sup>湯<sup>とう</sup>と<sup>り</sup>刻<sup>こく</sup>て<sup>り</sup>少<sup>せう</sup>き<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>形<sup>けい</sup>と<sup>り</sup>  
他<sup>た</sup>り又<sup>また</sup>菡<sup>かん</sup>萏<sup>たん</sup>の<sup>の</sup>花<sup>はな</sup>と<sup>り</sup>これと<sup>り</sup>帯<sup>おび</sup>と<sup>り</sup>邪<sup>じゃ</sup>  
を<sup>し</sup>と<sup>り</sup>辟<sup>はく</sup>と<sup>り</sup>化<sup>くわ</sup>せ<sup>り</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>俗<sup>ぞく</sup>と<sup>り</sup>玉<sup>ぎよく</sup>泝<sup>そ</sup>る<sup>る</sup>惟<sup>たゞ</sup>子<sup>し</sup>  
り<sup>り</sup>と<sup>り</sup>明<sup>めい</sup>約<sup>やく</sup>知<sup>ち</sup>是<sup>これ</sup>天<sup>てん</sup>中<sup>ちゆう</sup>第<sup>だい</sup>旋<sup>せん</sup>刻<sup>こく</sup>蓄<sup>たく</sup>湯<sup>とう</sup>と<sup>り</sup>邪<sup>じゃ</sup>  
又<sup>また</sup>高<sup>かう</sup>帝<sup>てい</sup>の<sup>の</sup>俗<sup>ぞく</sup>より玉<sup>ぎよく</sup>燕<sup>えん</sup>叙<sup>じょ</sup>臥<sup>ふい</sup>艾<sup>あい</sup>虎<sup>こ</sup>輕<sup>けい</sup>

○今日<sup>けふ</sup>京<sup>きやう</sup>師<sup>し</sup>が<sup>が</sup>儀<sup>ぎ</sup>の<sup>の</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>と<sup>り</sup>競<sup>けい</sup>言<sup>げん</sup>あり<sup>あり</sup>邪<sup>じゃ</sup>友<sup>ゆう</sup>七日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>邪<sup>じゃ</sup>  
潔<sup>けつ</sup>奇<sup>き</sup>として<sup>して</sup>系<sup>けい</sup>あり<sup>あり</sup>を<sup>し</sup>敷<sup>しき</sup>二十<sup>じゅう</sup>足<sup>そく</sup>朝<sup>あす</sup>日<sup>にち</sup>より<sup>より</sup>乃<sup>なり</sup>是<sup>これ</sup>と<sup>り</sup>  
ろ<sup>ろ</sup>て<sup>て</sup>二<sup>に</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>と<sup>り</sup>定<sup>さだ</sup>め<sup>め</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>殺<sup>ころ</sup>来<sup>らい</sup>と<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>と<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>

二つ又とるべし勝負乃本とてふる席へ西の方に楓葉  
 有り乞よりおまて落くらくきふれらると思ふす尺  
 柄は法人群集とを依故ふる坊にありて西せして  
 大木に樹れ樹のありて心やまをいんるて有りて  
 河又横敷をいんる有りて立万ものいんれありに  
 多らるるさうり杖をつててさひりるるんせせまらるを  
 乃るにさうりらに群集れ中へけとあがらんぞまらる  
 ことお竹杖とつたてくる乃路よりきくらよなるを打  
 たるまらるるをたんとさうりてくに張のありのありて  
 横よとこれ葉のありてちんちんもこつたまらるるたより

鳥よありまらるるかをあり又入る川中まてら飛  
 りて川よとち衣裳とぬくしてさうりてまひり  
 潔斎とをたてとてさうりて客人の様たるより  
 さらりありてさうりてさうりて元契の村民社人  
 なるすき日よありてさうりて移る代あり火とてさ  
 我あは火とて人よりさうりて様とていむと也  
 ひりて大向故座殿にさうりてま日に競言騎村乃事  
 有りて又位とてさうりて延喜式とてさうり  
 花名御懐よとてさうりて又月六日代前拜堂ありてさうり  
 くるるるて我に殿より幸有りて上府請射乃る有り

又日み夜いよれ人をまはるるに案ありの案乃沖る  
 ぬ葉と競る乃車おまよと人か葉あふと朝の足  
 五りよ競るとりまのりへ乃騎跡走る乃後式之  
 按とゆ又文器雜器の編午日走る理之藩柳と  
 あまびもろつこつて今日るとまうまの坊あし  
 ○今日山城紀伊郡涼宮乃里及北森の案ありを  
 遣とまうて競るあり此社を延喜式よりの志懐す  
 乃神社なり日本後紀の鴨別雷神社の別也此  
 とりそりち又三所お皇子ととびあふあふ  
 乃良親王伊豫初王井上内親王也今日城ふ

ぬよりひをまのりるの老紀天皇乃御宇天皇元  
 乃一異國乃凶賊素來より中えられた天皇身これ  
 涉子乃親王に大將軍として遣派あることあり  
 乃何りまきて當社より誓うて給ひて又月ありの  
 志路の神靈志うとまき徳又大風吹事して大瀧波  
 とひあがへ一もまびつ異賊一戦もと交ひの波うまふ  
 ひあこしくをちろびもりのも爾親乃出たふ  
 率勢乃海とまひひけとる乃又都那の意み今  
 日首海のかもことちりともくつる事ととひあふ  
 乃如とるのほむの事むつる事ととひあふ

又付薄記板と書此形よりさうなる或流の意にさると  
仰り或木と流さりのてくがづにまゝして戸知は立  
仰りしうを年の風信美巧とさのて本とあつて  
くさ此形と云ふを又さうして案文を記さう  
或甲冑と云ふ世初戦と云ふ世我闘乃勢をたさう  
然るく戸知よりして仰り乞とかがとく子又紙流  
りく乃流と云はく世軍一よつ希是と云戸知よ  
たさ仰りこれとのびりと云或流と用りも仰り或  
長流をかえて是と流をぐと云初日より又日ま  
て又書此形事まら

扱とるにをろくしよもこれと他なる事仰り案文  
雜記めいなく場中お初め人天師を盡して齋  
又土をく天師を仰り艾といふ流し一菘と  
いふ流し一門よま流し又艾を採流して人乃  
形に他つて戸乃よまかこれの毒まといふと  
とり 扱とるにをろくしよもこれと他なる事仰り案文  
○今日まありさのり事仰り荆楚案文記よ又及  
又日伊民後人の流百草又百草と闘しむ乃流  
ありと云々せり志うれはるし一へりもろくあり  
日本紀は藥流と仰り 章流のり性より百草の闘香君  
二九事と仰り

又章第云り濟又今朝園草の宜男と有り記あり  
 園草の石小共圃今和結及無被下百多の香こ有り  
 百草の汁と搗り糝と膏と膏葉に記を  
 多と百病瘡疔と貼して膏の膏葉とそ功十倍  
 せり又今朝日未も肉百多と搗り汁とつと出  
 石原と和志と餅と一徳をす一切の全瘡と治  
 じと月令廣義も凡えと有り 百草と取は牛膝澤瀉百葉  
 凡えと有り牛膝を胎と毒と一伏毒  
 百草と取は毒葉のり也有り  
 ○夜葉草とそ丸細の日なり又艾草とそ丸細の日  
 暮要といふく五月 廿日採艾治百病  
 丸艾とそ色と蒸午入丸細の日なり

と但艾乃苗なりとけりなりと 穢之丸丸蒸に  
 乃そと有り丸にうり艾を徳多と有り又搗研の  
 丸の用へり乃きれも快吹もくさの性なり又紫金  
 錠生金丹千金錠子ありと合のりあり今日有り  
 ○又今日蒸液と有り事有りこれ原とそと小迷意  
 たりと 案附記と有りせり 月令通考の越地と引て蒸  
 石屏り踏午乃有り  
 榴花角黍舊時新何處也石酒樽堪笑江湖  
 老婦客也隨蒿艾上柴門 又 友人  
 海榴花上滿る白切昔露沾漢殿今日猶解意用



平又為ら痛飲讀難強

十二月一日竹と後栽へ一青事い六月十三日と竹碎  
照とす又竹速目もいふこれ日竹とらうぬまいらか  
露の溜とあうなり

明日 体倍

は月淫夜ふこれと梅取とらづく又徴取ともわなり  
梅雨代中肥との芙蓉石梅梅枕をこの枝とあうい  
てさくしと月令度義よんえなりはは時多主  
つし蓄被水梳をうせと甚よく活又家家人功  
とに世の奴僕事と度しおとす十八の家平調

りし梅取之森の中を流僕をうて薦と何ん  
雁とぼくしむし一薦を書籍書相食油と梅  
新と裁しと草の木葉荒よむらひ場屏を草ゆ  
そ功州度し又梅取必と大籠と貯重茶と祭  
とれいとれつと美なりと茶湯に刃え下世日  
とへてと飲りし妻又梅取あむく痲赤を徳へハ  
るれあといし薦と他りふこれと用まの賢し  
やとく夜試何さよこれと月れい度けのまて  
新垣り食相お受り見えなり  
梅取あ入の脱給とらうて一決し冠し屏殺よ

とく岡人立友の後唐より日と入梅す。芒  
種代後王より日と入梅す。次邪極にそく芒  
種乃後西にりり日と入梅す。小暑の後赤  
より日と入梅す。又碎金綴よりそく芒種  
乃後至に南より日と入梅す。又至乃後唐  
乃より日と入梅す。又至乃後唐  
後至より日と入梅す。小暑の後至より日  
日と入梅す。芒種の後西の日  
弟乃と入梅す。是より日と入梅す。其後唐  
衣代親より日と入梅す。九梅衣か入の

物と入梅す。小暑より日と入梅す。芒  
種代後王より日と入梅す。次邪極にそく芒  
種乃後西にりり日と入梅す。小暑の後赤  
より日と入梅す。又碎金綴よりそく芒種  
乃後至に南より日と入梅す。又至乃後唐  
乃より日と入梅す。又至乃後唐  
後至より日と入梅す。小暑の後至より日  
日と入梅す。芒種の後西の日  
弟乃と入梅す。是より日と入梅す。其後唐  
衣代親より日と入梅す。九梅衣か入の

梅と瓜は重々乃抄に摩耶夫人の中陰に命なり  
此不善外とあり西華とありくとり予等  
中夏生六廿二候乃内夏生の才三候を是ハ先に  
附會して毒徳をとりをり

夏生の日并と後水と改れハ瘧疫を止まじと謹此礼儀  
志よ見たり又夏生乃後雨丁は雨り日丈ぬの交  
と改れハ大のありと千金前に志りたり

六月乃初毒梅と丸皮と多づり梅と毒露又入出上り  
梅の毒と後收用と鳥梅の皮はまつし時とそく取  
一、又梅つる梅りをも製成し

六月米苞を改米ぬく一喪くらハ苞ゆりめハくすち地  
生ハ又夏乃乃拾穀乃原と多く米苞にぬり並ハ不潔

六月天樞中腕も又一暑月のくを何りくめ保をすく  
又梅毒と保醬と一梅致餘論よとく古く於ては  
宿百滋味競く業し於て毒也保家金水二膳一匹燻火土

之胆尔

月令よとく是月也日長正陰陽氣死生分君子畜戒必  
掩刃母澤山勢色母或進為滋味母致和者欲定心氣又  
曰是月也ハ居る可い毒胎室ハ外ハ渡りハ生毒樹  
保心種よとく乞月於井乃深穿ハ井よりりりり毒

かり一先おかり雜まじれ毛けとふくその中なかにとくくろくた毛け 旋まわ舞まるものむとれりそとれ舞まるあり

此月このつき遊あそぶとくくろの力ちからより一ひと目めを挿さすく金かね匠やう助すけよ月つきを

ノ又また煮に餅もち鯉こい魚いし雜まじ及およ未ま熟じやくせとる果くだものとくくろゆかたれ

鱈たらと鮑あわ魚いしとれどく食くへくは又また枇い杷ばと炙あ肉にく熟じやく麩ふ也なり

杞か豆まトく食くるやうれ 月令度義考 干か金かね方かたに持も鹿かの肉にく

と食くるやうれ又また金かね匠やう助すけよ又また月つき匠やう助すけの俵たわら水みづと

飲のみやうれ魚いし鱈たら乃なり精せい涎ぜん肉にくにけり乞ことのめめ瘕けとたり

は月つき農のう人にんの田たに苗なと挿さへ又また圃ほに大おほ葱そう乃なりたねとく

は一ひと一ひと烈れつ日じつよへととかりとく

又月またつきのち候あき才さい一ひと控くわ娘ぢやう生せい才さい二ふた膳ぜん始し鳴なり才さい三さん反はん舌ぜつ才さい

右みぎ芒ま種むすれ三さん候あきあり才さい四よ席せき角かく解かい才さい五ご膳ぜん始し鳴なり才さい

右みぎ半はん反はん生せい才さい右みぎ三さん候あきあり

芒ま種むす登のぼ右みぎ十じゆ刻こく二十にじゆ分ぶん右みぎ三さん十じゆ九く刻こく四よ十じゆ分ぶん又また正せい登のぼ

右みぎ十じゆ一いつ刻こく三さん十じゆ分ぶん右みぎ三さん十じゆ一いつ刻こく三さん十じゆ分ぶん 月令度義考

六月

節と小暑と云中と大暑と云○右月の長は季夏月候 術を極つるよ○右月乃利ぬと云夏月と云と云はつと

朔日しやくじつ賜たま冰ひやう節せつと云いつく今日けふ冰ひやうを食くるやうあり梅うめとあり

仁徳にとく天皇てんかう元げん和わ十二年じふにねん又また月つきに額がくの大中ちゆうちゆう七しち反はん宮みや子こ團だん結けつ也なり

よふ水にありは出給ひ申はよふる中と云わり  
給ひしる廣屋と給ひしるやうなるはあり人  
つらして足を通ふは塵ありと云ふ何れの  
何れに依り人を死して何せ給ふは氷室を  
中室子の氷といひやうにして納むらうと何せ  
給ふ給ふと云ふと一丈餘りありの  
また草葎れと云ふやうに氷を焚くは  
やうなり大旱もよけよきと云ふ契月も用  
あるを何室子の氷をに流帝もよせ給ひし  
と云ふ膚感ありしう一日幸紀よみきり  
日

あま氷とも初ありを後より委を  
細く團く水と云ふと焚れ給ひしるを  
丹波のおふは氷室ありなるも  
乃大なるもとりも氷と焚せしる民間  
葛腕製せし給ひしる今日命して氷と  
らふは準す

りろくしる氷とおさひの事あり周強し  
職と云ふ氷室とつらなるなぬり去  
し深ふ迷谷の氷と云ふと云ふと  
はぬく暑きと云ふは氷は出  
て

けりし緒ふ毛請ふ二之日撃氷沖く三之日納之津信  
 とり左傳ふ日在津陸而氷西陸現觀る由之  
 とあり是れ氷公也之と出ひるをいふあり晋  
 の石季龍三伏の日氷井裂け氷と氷と上陸す  
 阿之ーさず鄴中記よとてりの記  
 六日神龜を製する日あり製法ハ好まむとに詳みれ  
 ころに記し及り也

十六日己日如之とありあり秋林宮季物後一とくか  
 ぶらハ嘉祥とつたく仁明乃と金とる形和の比也  
 一御代乃さしきとありおとせれと一毎哭後上のれ

解一乃ささくふつていふくい才とありささくひたよ  
 一と月方なりとありとる吉日あり一とくはつ  
 かりの尸をくしてその日切こなれ年号なり一かつた  
 一嘉祥とものせつりありとる嘉祥とゆふ  
 一りくさくありとる一嘉祥とる後の名幹り記  
 一あり又ありとの後ハ由は世伝よと傳り一と  
 大槓乃付よと月納後乃りさびりてとる揚子と  
 一ありありとの一ありありの嘉祥後十と又一と  
 一合物とありとるありとのとありありの嘉祥と  
 一ありありの年号ありと十七年ありとる年一ありあり

歳は元年より十一年までの事なりける一は十六歳に  
 なる今日一人の事なるもこの世に於て是れは  
 古に於ては事ありきとされたる事なりけるに  
 今猶と云ふは四事物語の事なりけるに  
 事なる事海よ久しなる事なりけるに  
 江邊に身を置き根は年中の事なりけるに  
 志は國史も志する事なりけるに  
 是れは事なる事なりけるに  
 是れは事なる事なりけるに  
 是れは事なる事なりけるに

晦日 沐浴の日 是れ月々なる事なりけるに 世に於ては

天と地の事なりけるに 天と地の事なりけるに  
 天と地の事なりけるに 天と地の事なりけるに  
 天と地の事なりけるに 天と地の事なりけるに  
 天と地の事なりけるに 天と地の事なりけるに

乃圓如の事なりけるに 乃圓如の事なりけるに  
 乃圓如の事なりけるに 乃圓如の事なりけるに  
 乃圓如の事なりけるに 乃圓如の事なりけるに

又此の事なりけるに 又此の事なりけるに  
 又此の事なりけるに 又此の事なりけるに  
 又此の事なりけるに 又此の事なりけるに

とのひらなをたふらひにけし髪かみ又また中なか長なが結むすととあつたをかみ風  
 志こころをこころ想おもののととんん少すく異いありあり去き月げつ小こ同どう月げつ所ところのの後のち  
 りりかかいいかかららわわちちりりああはは後のち代しろ月げつああののううととああ  
 幸あはれ楽たのしみ又また思おもええししりり又また今いま日ひ川かわ系けいににああるる庭わだかまににああるる  
い人ひと形かたちとと他ほかののああららななししととああららししてて河かわののかかららす  
 とと母ははののおおももいいよよ

のの中なか御ご柳りゅうよよくくああ月げつ結むす髪かみととたたくくををひひののああ  
 小こ舟ふねとといいふふああのの河かわををよよなな中なか串くしたたててああのの  
 ああののああららししととああららししるる夕ゆふ又またああららししるるああののああららししるる  
 一ひと賞あはれ展あひらののりりみみああららししるるああののああららししるる





三伏の入りたる日... 九夏... 伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...

九夏三伏し... 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...

夏三月九十日あり... 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...  
 伏... 龍... 日... 三伏... 金... 氣... 伏... 龍... 日...

梅百歳に後書と日よ物と一紙書よひる表  
紙とよひて於て帯繩を無く物と表紙の換す  
天氣ぬりありとも一日に二夜たり一紙より  
一午未だは收む晩よの暴風の交りたるや收  
む一層下よありて熱をさす一紙よ多物より  
相家に初む凡書を晒すより一紙よ多物より  
らに暴風の交りたるや又多なれぬ家奴厭ひ  
使くると用ひす書とろこある何の換換  
あふ信箋一紙よりとら多と物に縫く古紙の  
しく換中に納者と命とせりて書と用ひ

屋中に久しと晒さんよかかれと烈日に一交晒  
たり書とよひに晒すこと毎年久しとせ  
ともいさう書代換換より古人も書と知よとせり  
と尺とよりと之と色をよの表紙も表紙と下よ  
とよひとよきつとに居るも用よとて古人書と書  
多に多く書と用く書とと今八七里書こ  
也あり 但せり書ハ山懸れるや書ハ又る物あり書ハ書を  
書者の名や何よりとよひあよ今我信つらやうの書と書  
乃よ細りハちややつて 又書と書厨の中よ入るハ書は  
紙書と書と書と書厨の中よ入るハ書は  
何く一はと換換を角とと又より

圖書を讀むも一時許日と物と一と七海と書

海に去る紙方とのどに雲一繩かけ半にひかるを  
 何く久しく眺まうくは圖書のうもをりま一表  
 とまもまへうひもまよひと方り紙とまひひるくま  
 たらとあひま一物よまもま力と能やま一これ又  
 女座とれは表と申す道生八叔よは月日のち梅雪のあま書  
 新衣報まよとまうまうまう一書一第入  
 二とあひし書圖書衣服をうくく封してまかびおま  
 梅雪とてはまは又圖書よまされてまびらうまことまう  
 甲冑とまもま布、まめ布とあひしてま付まうくは  
 眺まうく久しくを眺まうくまらに梅雪とま  
 丁度雪白と申す細く一  
 衣履を眺まうく志願を久しくを平うくま又其縁紅を

かへの色つらまうくは物らひは眺まうくまこれと眺ま  
 久らう物影おま志よま月衣乃ひて色つらたらと  
 冬丸の汁まひく一造一そ痕ま又枇杷のまぬを  
 すりて細糸一して造はま距白ままうり丹家玉用  
 ち梅雪よまびらう衣服とハ梅雪と奏一して造一  
 わり又居まおま候よま凡衣服乃書よ清らうと書  
 仕代皮と細糸一張茶と書分よ合せまらる上よ  
 ひ移らうま温湯とてま一してまくまうり相まう後  
 洗のく一又新衣南里とまも絹のけづま一から二少紙  
 ちまもまらひま志又白梅とすう付て造まもま一ゆま

あがれらる衣服と滑石天竺粉者等分を煮て  
付粉煮らる時又煮一五夜を煮いて自然又  
洗く亦二坪粉とひ粉うけ糞汁とてこれを  
のきとれしとす又煮と角と洗くも一添  
二けり煮てら衣服と洗く杏仁胡椒分を合  
研爛して洗く亦と搗く淨く洗くハ白濁又血  
汚らる衣服と冷あるく何くハ蒸又白衣と洗  
く蘿蔔乃煮汁又ハ蒸湯を細煮して水  
入れて洗くハ白くなりあり  
新に煮らる葉種をも細く包かうそはとひく  
新

目ふあてく睡く一ととと海より葉ハももく日と平一  
千金方ハくく葉ととく日ハ平一とかくれ葉力  
うとくたりのあまの苗田用ハとる葉ハ煎りて  
新瓦器に入さくく日ハ月ハ付手たてて煮  
又好ま一一年を煮れと新一ととと一丸散乃  
葉もめはと一とと元世人葉と煮一野下と係  
獲とれらる葉はた多の事を煮く次葉を丸人を  
煮ハ病をとり物それハ煮てて收めたるは  
乃ぬまざらやうく一とととととととととと  
ハやくちの粉瓶を多く地を葉と入すくはめ

口よりくぢり垂るしやふとれハ久しうもても平  
くせいの是事とたも山乃良法あり地考は正あは  
恙活の計神通黄茂首草大まごハ皆く晒されハ出  
くも地をりも能く志をくき候るもふれ氣候  
さくたらぬまう

萬物も蟻へまのハ赤く蟻とくくすたねあり  
くも地をりも能く志をくき候るもふれ氣候  
さくたらぬまう  
あまうけ垂るしやふとれハ久しうもても平  
くせいの是事とたも山乃良法あり地考は正あは  
恙活の計神通黄茂首草大まごハ皆く晒されハ出  
くも地をりも能く志をくき候るもふれ氣候  
さくたらぬまう

物中五又の五倍子鉄葉とて黄澤の赤色を中  
子と收りて其根ハ黄毛の整備をうく輕粉と  
體へ子取としくく乾くと結くこれと收むく  
とを経ても地すハ石ハ川椒と黄毛と葉と  
汁とく松葉ととく子取とを澤と又丸くと  
潜確部すよとく又遊乃汁黄毛の汁をよ  
浸してあきても地す又又秋乃石葉と  
樟樹と入るハ地すハ石と地すハ石と  
い月たれハ葉とく飯饅と又葉と飯の上よ  
ハハ一宿しても地すハ石と地すハ石と

魚うと類ちか食くをしと井い中ちゆうよりけしとまのたは  
月つき令しやう度どあまちるをり又また月つき令しやう度どとほるるをりを  
うごのこここおも間まとらわかつつこの中ちゆう入い  
まい久く一いちをり指ささしのの類るいを併とりて食さす一いちを  
二に片ぺんをあまいとり又また勝かち雪ゆき水みづを新とりて食さす一いちを  
と深一いちをり指ささし

又また月つき令しやう度ど一いちをり茶ちやとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
性せい何なにくちのの酒しゆの又とりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす

油あぶらをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす

此こ月つき令しやう度ど一いちをり茶ちやとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす

葉は丸まるとり多た量りやうとり蒸じやうとり一いちをり味あじとりて食さす

○乾かん丸まるとり一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす  
一いちをり味あじとりて食さす一いちをり味あじとりて食さす

○尻と糟淹よさらは 世倍よ奪らつつけと云尻と云  
母のつ子孫と丸くうらつとこそ奪らつひて多氣  
乃才たやうよかえう一尻乃片まれの肉よ塩分め  
やと入尻あつく丸九分目を入樽よ入すくとして  
うけ二枚地紙と丸かき一を塩汁とあひて塩汁  
乃せくはあつと日よあしとく尻よ糟を多くあつた  
せんと靴よ入すくして尻のつとあつたわらひて  
うよ塩とあわれあつたうらつとくは塩とあつた糟よ塩  
せくくう一太抵糟きせよ塩め合やとせくくう  
糟多く尻とくたれたがう一尻多く糟すくたれた

倍の敷せきよりす尻とはく一尻めあつとつとあつた  
まとしてう靴の口より風ひぬちうはあつとつと  
赤土あつたぬめま一樽をひひろよぬ靴のせ  
とつたけつとく一樽よつとあつとつとあつた  
男とよくせく一尻ハ尻くうらつとつとあつた  
う一又紅土赤土あつとく一太抵塩よつとあつた  
うけくけつとあつた糟よけつたハ糟美とく  
靴子かきと平揃と一太抵淹よして貯ま一  
○靴瓢乃製法 ぬ天氣とうらつとくゆらつとあつた  
とつとあつた糟よ切つとあつたと各うらつとく

あま入る後糸を引て縄ようけくわひまのり一徳  
 五等糸一くつたのこく氷入天氣好時糸一  
 縄ようまをくを引一能ひふる何重なるこよ入を  
 走一古代こく引一て後沸湯こくく又かせり  
 又量ゆるるとととを味あえ

○塩干瓢乃製法 瓢を大片に切てついで中  
 うを並しとてを口れてる時糸一引て後つ  
 こ入細をまき一吐常の久く引中を中中  
 ○乾茶子の法 日く茶子と糸皮と煮こ  
 て中重取ら何重引一糸糸をくひこ一て

小加

地は赤茶とよ茶子とゆき子焼の原

○紅豆塩淹の法 米粒を少く塩に升を合こ  
 くの煎煮と英もよと煮こけの久く一と換せり茶  
 子も又かくれらるる

○月輪油の製法 大豆と煮て大豆乃こく煮て大

○醬油の製法 大豆 塩 各一石 水 二石二斗

煮てつ 先大豆をゆきこく煮白く一煮てついで  
 石臼こく引こり大豆と煮大豆乃こく煮て大  
 豆の粉とくこゆか痛煮よひる中煮こよ入煮  
 有す麴麴の能分こく何右に石に斗のあり塩



一石とせれた登みくよく煮るを鹽湯と大くたきま  
 一とせむとひくしてをわつてさうかとたの何れも  
 他り入るうとあててもう一他り入るよくしつ初より  
 家内肉の重くつらうし一煮下り又日加よきして後  
 間よ入るをわつて水入て止か入の入り一他り入て中  
 むりやいこく懸と入へ一右代たぐや紅き少くは米き汁  
 よ水の中入粥を煮て塩き汁入よく拌せし御冷た  
 西大れお他物よ入るうとて日殺三千日やとて酒と  
 ことしくさくろも入り桶のこつろ元とあをを桶  
 よ入る元入りせりまう一上るハヤ一と懸まへ一初

作又一日より元七午五つをくして何れつものなり  
 洗よ志やのちと後美味換一たろよ昆布と切一全の  
 味よくならまなり

○ひやの製法 大豆 ちん 大麦 ちん 塩 ちん 水 ちん ちん

まのけりやとゆくつちあはれせり一豆ハ焼く引り皮  
 とまきまかたませり一まよてひしてまきま入麴よ水  
 たの時水と塩してよく煮てまきま一純よゆりたご  
 地りたご後日ハ焼く引り味をとり何れ一純の  
 只と純よたご平たごまきまらわしはま一まきまされ  
 味よく家す一純よ中島よ入る當何合すつとにあら

とく一瓶のほどと志らく野くすす

○淡豆納豆の製法 大豆を山麦粉と一定量豆  
しを豆れと煮糲し中麦の粉と夜と共玉  
舟入麴よりすろりきり水で煮よ塩を入して能く煮て  
薄よ入きり一たれ麴とくくして塩汁の内よ入又  
煮く生薑の椒皮薄皮たくとくすろりに煮てり  
乞とも麴を一内よ塩汁の内よ入ふもしてり  
をくけし塩汁にけくくとくすろり煮くす時につ  
之の中日をこして味よく付くす一内よ塩汁を煮く  
煮てもあるし煮くの日よりて煮にけくす

○又納豆の法 大豆を大麦を塩を大豆と

豆れと煮く煮く煮くすろりして粉り大豆はあつ  
る肉よ棒むりろとけく一煎を次の日あか  
土をよ入かうしよゆきせく後湯と入水はむりか  
よ入て七月やと垂辛皮を入るもそのと志くは  
白網麻薄皮を入三日やとゆきとけく煮くは  
日よりして又ゆきと煮く時あかあつと煮くは  
○金の等鼓の製法 和別海士のの紐也  
又此糸を用りもり大豆つ米りて  
引りり皮と去麻を細くとあかひあつ大豆系  
能く煮く煮く煮くはあつ大豆と麻掛

の大をこきとつらうして蒸く熱したる時細末の蒸粉  
 と拌せしむる入粉せき種くるぬきて麴麩の付  
 一三日おに蒸 かてつらとく切らる 白虎 これ七喜心かく 蒸  
 合大蒸子と瓜とと合の塩の合を梅入抄とけ  
 一夜蒸明りよるかきりあやむれ麴をしく一瓜蒸子も  
 抄のしをかきませく梅入抄とて抄のしとてく  
 つけ蒸毎日一二つ及うにせ十月許まで後苗考  
 二種皮の種蒸ひ蒸種と能印よ抄の拌又あの  
 しくあきとてまきとてけ至毎日とせせ七月  
 まで用へし三四十日よ及ハぬ味く入り後又かの

五條いんぎろくれ人乃好まよる  
 ○蒸年勝の製法 蒸く酒く等らうと合せ蒸よ蒸  
 弊く思とあひはけ月去月乃中一壺あきり抄よ至  
 炎日よ勝一七十日をとくこれと用ゆそののよ  
 たらやと酒と水と等かつ入毎夜か此をれいの中を  
 又かよ万の勝くあきり又蒸乃蒸を割てかて  
 うと入五の蒸とあきりあきりあきりあきりあきり  
 日利よる時梅をよ換塩したる塩と併せと一又  
 海塩乃塩を早とる何半と造る是泥とよきと  
 他抄を入へし此をれハ此の氣味とよよるか

元乃御陰の刀繼奉と皇月よ夜をぬくはこれハ瑞雲の  
尨帝乃所もしりくぬく之ハ又日月多能く御  
才とそりく之ハ

夏月改出と古法 茶和 皇本整仁ニテテ 雄業 川研坐  
細業一と密一と時をくし皇皇よんを禁し居家  
為用よらくしり又齋乃骨を焼ハ故皆免うあされ  
骨くしりくしり川魚の骨ハ禁之ハ故故と古又  
浮萍と菟流とと焼てもりしと月令度皇親よ月令  
しり又千金月令よいぬ月よ浮萍と取く陰平よ  
雄業よまきく禁之ハ故を解と志るなり又皇月

又日回申の浮萍と菟流一依皇月血となくこれハ  
濃一又物一又濃すぬけとるなり故を解して後業一と  
香とち一熨之たよ故解と云と居家為故よりなり  
麻の葉とけりなりよけハ之故とさるなり物故おま  
志よんえたり和信ハ極乃末となくこれ又とく故と  
さるもの奇りなり物故るもわたり乃末とりさるハ  
なり一古今集系乃歌よ

乃トもえとせり人 時多大本故乃ゆり

東回神皇正統記卷四 去後被蓋指印供除



凡惡寒乃時移會と傷寒一と權て秋時よりなるべし  
 赤世保元よりく五月赤れん入房勝似赤膏旨又治老人  
 うらぐら後内流乳肉の休一惡寒外と蓋すうらぐら  
 甘く風をわたり冷物と食ふあま果糖くわんとうの菓と生れ温  
 暖才の物と食飲して大に飽るあつちかかれ  
 獸藥じゆうりやくの生きたるの日よりくむまると温くあつち寒気さむけ院いんに收  
 てあつちるる温く一あつち日半の草一あつち日水とそいひ  
 冷寒ひやむけお逼てあつち花弁はなべんちよあつち枯るあつち月令げつれい寒氣さむけ乃あつちえあつち方又  
 老圃らうぼ乃あつち云あつち温くあつち地あつち草あつちさめあつちれる時あつちああつちと温くあつち下あつちりあつちの  
 温くあつちよりあつちと但あつち暖あつちくあつちるあつちく温あつち朝あつちもあつちるあつちく温くあつち一

月令げつれい廣あつち寒あつちよりあつちくあつち六月ろくにんはあつち花あつち楊あつち水あつちとあつちくあつち泥あつち土あつちといあつち草  
 乃あつち原あつち羊あつちのあつち畫あつちとあつち壅あつち一あつちはあつち多あつち一  
 秋あきのあつち比あつち颯あつち風あつち吹あつちああつちくあつちいあつち阿あつちくあつちくあつちめあつちをあつち修あつちをあつちなあつちしあつち梅あつちをあつちと  
 圓あつちくあつち一あつち第あつちをあつち乃あつち梅あつちをあつち堅あつちくあつちとあつち一あつち又あつち栲あつち核あつちをあつちとあつち油あつち一  
 月あつち進あつちとあつち食あつちハあつち目あつちとあつち昏あつちすあつち羊あつち肉あつちとあつちくあつち一あつち神あつち守あつちとあつち傷あつちハ  
 聖あつち息あつち厚あつち鷲あつち菜あつち菓あつちとあつち食あつちすあつちとあつち忘あつち又あつち生あつち麥あつちとあつち食あつちハあつち水あつち瘧  
 とあつちなるあつち犬あつちのあつちぬあつちるあつちれあつちハあつち終あつち牙あつち患あつちとあつちすあつちれあつち冷あつち食あつちとあつち言  
 用あつち一あつち冷あつち水あつち生あつち破あつち果あつち油あつち膩あつち甜あつち食あつちとあつちるあつち食あつちすあつちるあつちちあつちちあつちれ  
 凡あつち煎あつち炒あつち燻あつち寒あつち乃あつち厚あつち味あつち皆あつち宜あつちくあつちわあつちくあつち用あつち一あつち月令げつれい廣あつち寒あつち  
 凡あつち交あつち乃あつち石あつち補あつち瓜あつちとあつちるあつち食あつちすあつちるあつちちあつちちあつちれあつち瓜あつちのあつちああつちよあつち入あつちてあつち沈

色のハ大に毒ありし月令度義より走り又よく双  
 葉乃凡人を殺又油餅とせし一と食り次物類に  
 感志よ此ハ白梅とゆき輝と何まハ凡と食し一と後  
 白梅と食し一又麝香をよく凡と消化す又石香  
 魚と炙食す是ハ能凡と消して水とあひと中食に  
 六月乃六候身一温風至身二蟬聲凡壁身三露乃  
 子智大小暑乃三候なり身四腐草の露乃五  
 土潤溽暑身六大雨の土潤乃七候なり  
 小暑昼六中刻二十四分夜三十九刻四十分大暑昼五  
 八刻二十四分夜四十一刻四十分月令度義

土用

又土王をいふ

春ハ木旺一夏の火旺一秋ハ金旺一冬ハ水旺す  
 五のハハら土ハ四時よあわくあつすこと事なり  
 春よ完れり位から春なり氣あつくして四時ハ  
 物より辰戌丑未月の本より寄旺する事各  
 十八日一年よとつて七十二日あり此七十二日との  
 ろく時を木火金水を又各七十二日つて一  
 一年とたひたつたよ土を本とせうんあまはれ土  
 用ハちちる秋の土用ハ土衰者して感する一冬  
 乃土月の水と木とれあはれはちちるすなれ土

用也火と金とれ方より使火よませり成るは  
の玉用と云く一と土まればすす土とく金を生ひ  
成る秋乃金と土よりまするまより赤れ月を火金の  
百あり又一案の中なるれ中央の玉一令を  
さくは揚ぐ又別の席とがひ乃と成る月金もそ  
事なれ次中央の土とのきり  
此國信之原の百月と  
いふ事ありと云れり  
これ理をたよりあるにや

信悦又六月七月は八日蕪及赤少豆と金豆ハ痘瘡と  
群と今の人ぬくさる事ありこれハ信氏初  
乃蕪赤少豆ハこぬれさるやと云く事あり

信り云紙之信よきやと蕪ありと阿れハ  
一よりさげりなりと云く事と云れハ後と云  
群ハ赤少豆ハ蕪吹つと云く事ハ正月食立事  
ハ群鷹氣信蕪菫坐蕪薑也又財後方に元日及  
八日麻子少豆各七枚と春を疾疫を消すあり  
これまの事初のまハハ事ハと云く事ありハ  
事と信くあやまりて六月はすりや群地獄  
人なるあり

六月七月の月ハ蠶と云く地と針群と云く一  
出信下



白乃久しきやまざる人用之これハ強弱ハ  
衰えたり病ハ少用之能ハ弱ト強ト用之ハ  
其本弱ト之ハ強トナリ

日本集時記卷之四畢

